



△時局座談会△

「太平洋時代」の虚実

今、太平洋時代の到来が叫ばれているが、その内実を

分析すれば、アメリカの後

退、日韓台の躍進、中国の

功利、ソ連の進出と複雑多

岐である。

日本は、この現実を冷徹に

認識して対応すべきである

と思う。

中嶋

嶺雄
東京外語大教授

漆山

茂美
京都産大教授

加瀬

英明
外交評論家

「太平洋時代」の幕開け不安と期待

加瀬 石原社長が言われたように、昨年ボンで発表された政治宣言の中で、太平洋地域の活力に注目するというのがうたわれたわけですが、これまで重ねられてきた先進七カ国サミットの宣言の中で、太平洋地域に注目するということが言われたのは初めてのことでした。それを受けて、中曽根首相はかねてから、五月初めに開かれる東京サミットで、太平洋時代を大きなテーマの一つとして取

り上げたいということを提唱されてきました。首相はこれまでも太平洋時代に深い関心を持ってこられたようです。今度、首相がブリタニカ百科事典の年鑑に『太平洋時代』といった題ですが、巻頭論文を書いて、その中で、太平洋時代を考えると「胸が躍る思いがする」と、並み並みならぬ情熱を持って書いていらっしやいます。

これまで、太平洋時代とか、環太平洋圏ということがもう長いあいだ言われてきましたが、過去二十年間の太平洋圏諸国の経済成長率を平均すると六・七％という高いものがみられました。ECがある西ヨーロッパの経済成長率を二十年間の平均をとると三・七％で太平洋地域の経済成長が世界のどの他の地域よりも高かった。これからも、この地域が最も経済活力に溢れたところになっていくだろうと言われているわけです。

ところが、もう一方では、八〇年代に入ることになってから、アジア太平洋地域では不安定な要因がふえています。一つは、ソ連のこの地域における軍事力の異常な増強がみられてきたし、今後も続いていくと思われれます。また、アジア・太平洋諸国では最高指導者の交代期を迎えるようになった。フィリピンで見られた革命劇がその典型的な例ですが、フィリピンをとっても、韓国をとっても、北朝鮮、中国、インドネシア、シンガポールを初めとする諸国では、政権交代が行なわれる時期に入っており、不安定要因になってます。ソ連は戦後、ヨーロッパを主にして、アジア・太平洋地域を従にしてきた。しかし、七〇年代後半に入ることになってから、ソ連はヨーロッパで頭打ちになった。これまでロシア帝国のころから、ヨーロッパで行き詰まるとアジアの方に向けてロシアのエネルギがほとぼり出るといったことが見られてきましたが、現在はそのサ

イクルに入ったといえます。三月にモスクワで開かれた第二十七回ソ連共産党大会でゴルバチョフ書記長が基調報告演説を行なっていますが、この中で、ソ連としてもアジア・太平洋地域を重視するということを強調しております。

そこで、ソ連も太平洋時代を強く意識している。これからは太平洋地域が国際政治の大きな脚光を浴びる舞台になっていくと思えます。その中で、今後、日本としてはどう対応していったらいいか。お話し合いをしたいと思えます。

東アジア中心の「太平洋時代」



中嶋 今、加瀬先生がおっしゃったように、確かに太平洋時代というのは非常に脚光を浴びてきたと思うんですね。その意味でこの地域には多くの可能性があるし、これから二十一世紀にかけて太平洋地域の時代になったということは、ほぼ間違いないような気がするんです。歴史的に見ましても、太平洋に注目するというのはかなり古い歴史があるわけですね。私の記憶では、たまたま香港のことをやるのでいろいろ材料を調べていたところ、十九世紀の終わりにE・T・アイテルというイギリスの歴史家が、『中国の中のヨーロッパ』という非常におもしろい本を書いているんです。中国的なものの中にヨーロッパが進出していく、と。もう

既にヨーロッパの時代は終わった、これからは太平洋の時代になるということをお言っているんです。

これは考えてみると、漆山先生のご専門だと思えますけれども、シユペングラの『西洋の没落』よりも早くに太平洋という特定した地域に非常に注目しているわけです。それからこの地域を、徳川時代は「タイヘイカイ」と呼んでいたらいいですね。それが明治以来、「タイヘイヨウ」と呼ぶようになって、この地域は大東亜共栄圏に至るまで一つの夢になってきました。つまり、男のロマンを太平洋に語るというのがありました。そういう非常に古いきさつを持っています。特に第二次大戦中は、戦後、左翼の論客リーダーと言われた平野義太郎さんなんか、盛んに太平洋を鼓吹しました。地勢学的民族政治学の立場から大東亜共栄圏の裏づけをしたような本を幾つか出しています。

ところが、それと違って七五年に入って、ロンドン・エコノミストのマリ・マクレインが太平洋時代ということを再び言い始めた。あの辺から、もう一つ大きな意味での本格的な新しい太平洋時代が始まったのじゃないかという気がします。彼の言ったことは、鉄道建設・鉄道の革命、それから産業革命によって十八世紀の七〇年代から十九世紀の七〇年代ぐらいまでがイギリスの時代であった。その次が自動車の時代になってきて、今度はアメリカの時代になった。それが十九世紀の終わりから二十世紀の後半の七〇年代までだ。それから今度は、いよいよ太平洋の時代になってきた。彼が言ったのは、テレコミュニケーションとか情報時代、そういうものに注目して、新しい太平洋の時代ということをおっしゃっているんです。

日本では、大平内閣のときに環太平洋連帯ということが言われて私もその研究グループの一員だったんですが、当時はASEAN諸国からの反発もあり、アドバルーンを揚げただけです。つまり歴史の中で太平洋時代は、さっき言ったようにいろいろあったんですが、我々が手ではたさることができるといえるような新しい太平洋の時代の到来はまだ具体化してなかったような気がするんです。

それが、今、加瀬先生のおっしゃったように非常に注目されはじめたというのは、八三年を契機にしてだろうと思うんです。八三年を契機にして、アメリカの対ヨーロッパ貿易の額が、対アジア・太平洋地域、特に西太平洋地域——東アジアと言ってもいいかもしれませんが。それに比べてグッと減って、二八%から三五%ぐらいになってきて、世界の超大国であるアメリカの最も重要なパートナーはヨーロッパではなくなりました。つまりアトランティックの時代からパシフィックの時代に、客観的に物の動き、経済の動きが移ってきたと思うんですね。世界の重点が太平洋との交流に実際に移ってきたというのがすごく大きくて、さっきの中曾根さんの話もそうですけれども、単なる漠然としたスローガンではなくて、もつと現実性を帯びてきたような気がします。

おとしの夏、オーストラリアに一月ぐらい、講演に行っていたとき、向こうの人が盛んにWPR (Western Pacific Region) と言っているんです。それがもう略語になっているんです。「我が国は西太平洋地域です。だからWPR」と盛んに言うものですから、初めは「何だ？」と思っていたら、「WPRはいろいろな可能性を持っている」と言うのです。オーストラリアはまだそれほど活力のある社会とは言えないと思いますが、非常に活力のある日本や台

湾、あるいはアジアNICs、そこに自分たちを位置づけることによつて、新しいアイデンティティを求めようとしている。

ただ、それでもまだ漠然として思うんですが、ソ連の進出のことは後でまたお話しさせていただきますと思いますが、もっとも強調したいのは、太平洋時代とはいえ、実際には日本とアジアNICsなんです。その中でも、これからを見ますと、かなりはつきりしているのですが、シンガポールは先行きちよつとかげりが出てくるのじゃないか。これまでの物すごい成長のために伸び過ぎちゃったような気がします。香港は、今後、中国に回収されるというようなことがだんだん明らかになってくるにしがたつて、これは間違いない。従来のようなわけにはいかなくなる。そうすると、韓国、台湾、日本——日本、台湾、韓国と言つてもいいと思います。この東アジア地域だと思ふ。

これは、従来、日韓台とか日台韓なんて言うのと、アジアの冷戦構造の一翼であるかのように言われたけれども、その時代はもう去つたと思います。韓国だつて、むしろ中国やソ連と交流したいような時代になっていきますし、台湾も、従来のように大陸反抗だけのイデオロギー一本やりの社会じゃなくて、非常に成熟した社会になってきた。それから、経済のパフォーマンスがすばらしいですね。国際社会からあれほど孤立している台湾が、対米貿易は去年だけで百三十億ドルの黒字ですし、外貨準備は中国大陸の十倍近い二百五、六十億ドルあるわけです。人口は六十分の一で、そして、そういう経済のパフォーマンス、貿易総額は、このアジア地域に、中国大陸に匹敵するだけのものが台湾を中心として動いている。そのように実際の、かつ具体的な活力がある。韓国もいろいろ言われているけ

れども、かなり日本をキャッチアップしてきています。そこに、今、最も活力ある日本が存在していることを考えますと、東アジアと言つた方がいいと思うんですけれども、そこが中心になってグーッと新しい時代を今後動かしていくことになるんじゃないか。

現在、日米関係を見ても、これこそ日本が先進国で、アメリカが後進国のような貿易パターンですね。日本がテレビや自動車を買つて、アメリカは食料を売る。そういう大きな時代の転換みたいなものがあるし、そしてマリ・マクレインが言つたように、テレコミュニケーションとか、マイクロエレクトロニクスというようなことを考えると、この点でも日本、台湾、韓国はどんどん出てますよね。乗用車も韓国の車がカナダにまで行つている。それから、マイクロエレクトロニクスは、台湾の立場がすごく強くなつてきています。こういうことを考えると、逆に、東アジアはなぜ成功したのか。

いづれも日本的なカルチャーを受けた歴史を持つているわけで、そのことも一週解明しなきゃいけないと思うんです。ソ連のことはまた後で申し上げるとして、いろいろ言われながら、もっと詰めていくと、そこに焦点がある。そして、ASEANは非常に重要だけれども、域内は物すごく格差があつて、フィリピンのように、あるいはインドネシアのように、明日どうなるかわからない国もありますし、その点で、太平洋時代というものをと我々、一つ一つきちんと検討して、どこにメリットを置くべきかということをもう一遍考えていく必要があるのじゃないか、こんなふうに思います。

加瀬 フランスの歴史学者で、昨年亡くなりましたが、フェルナンド・ブローベルが、向こう側から見た歴史観といえはそうでしょうが、世界の文明はギリシアで興つてローマに行き、ローマから

イギリスに行つて、イギリスからヨーロッパ大陸——フランスやドイツに伝播しアメリカに渡つた。そしてこれからは太平洋時代であるというわけです。初め環地中海文明が栄え、次が環大西洋文明で、今や環大西洋文明が終わりつつあつて、これからは太平洋時代だというようなことを言っています。最近、ヨーロッパでも太平洋時代ということが認識されて、今、中嶋先生が言われましたように、これまでは抽象的概念であつたのが、初めて実を持つようになつた。しかし、アジア・太平洋地域という、文化的にも異質だし、経済発展の段階もみんな違う。また、東西陣営によって分けられているということもあり、ご指摘のように一つの太平洋地域と呼ぶのは難しいところがあると思います。

難問をかかえた太平洋地域



溱山 私は、文明的な角度からではなく、現実即ちした視点からこの問題を考へてみたいと思ひます。

中、ソ及びアメリカ、それに加えて日本という関係で考えた場合、何といつても一番ショックな事件は、アメリカや日

本が中国を承認した七〇年代の初期の時代ですね。あのとき、なぜアメリカがああいうことをやったのかといへば、これは常識でしようけれども三つぐらいの議論がある。一つはベトナムから手を引き

たいということ、もう一つは中ソ対立を利用したいというポリテクスの視点、それから、これは一部のアメリカの学者が言うことですけれども、毛沢東思想の解毒化——毒性をなくすんだと。つまり、中国との交流を進めることによって、毛沢東思想を実質的に抜いていくんだというようなことを言った人もいます。

そのうちの毛沢東思想の解毒化という問題とベトナムから手を引くということは過去の問題になつてしまつて、もう現実の問題にはならなくなつてゐる。そうすると、現在残つてゐる唯一の問題は中ソ対立をどうするかという問題だと理解してゐるわけです。ところが、これは中嶋先生のご専門でもあるけれども、中ソ対立の操作という問題は、失敗したという言い過ぎかもしれないけれども、余り効果がなかつたということは大体わかつてきたのではないかと。つまり、中国は中国なりの論理、戦略で動いてゐるわけであつて、西側の戦略に必ずしも対応して動いてゐるわけではないということがわかつて、それが、反ソ統一戦線から自主独立路線への転換という形であらわれてきた。そうすると、アメリカとしては、アジア政策をどこを中心に立てなければいけないか、という基本的な問題にぶつかつて、日本を中心とすべきか、中国に相当な重心を置くべきかという問題ですね。

去年の外務省が委嘱してやつてゐる、ギャラップの世論調査なんか見てみると、ご承知のとおりこの調査は、有識者と一般大衆に分けてやつてゐるわけですけれども、有識者の世論調査を見てみると、中国を重視せよという声の方が若干上回つてゐますね。二、三%でしたか、四、五%でしたか、正確な数字は覚えていませんけれども、若干上回つてゐる。しかし、そういう声はあるけれども、アメリカ

の基本政策としてはチャイナ・カードがうまくいかない以上、日本を中心にアジア政策をきちんとしたものにしていく必要があるんじゃないか。それが、さつき中嶋先生が八三年ごろから経済問題との関連でご指摘になった面を裏返した政治的な視点となるのじゃないかと思うんですね。

それから、もう一つ、ソ連の方から言えば、ソ連がヨーロッパの行き詰まりといいますか、これも七〇年代後半から八〇年代初期にかけてのSS20に対抗するパーシングIIの問題等々をめぐって、ヨーロッパが案外ソ連の揺さぶりに対抗し得る力を持っているし、あそこでちょっと揺さぶりがきかないようなところもあって、ソ連としては、日本を資本主義陣営の弱い一環として見るといふ視点と同時に、日本の経済力、技術力を導入する。これに、日本は役に立つという判断があるのではないかと私は思うんです。そういう意味で、ソ連が日本に対して、かなりのウエイトをかけてきたという感じがするわけですね。

そういう大ざっぱな状況判断の上になつて、日本が東アジアを中心とした太平洋時代を形成するという点については、趣旨には賛成しますけれども、安全保障を含めての協力体制を東アジア——東南アジアを入れたらなお難しくなってしまうけれども、NATO型のものをつくることは非常に難しいと思うんですね。現行の状況の中では、それぞれのバイラテラルな条約体系、あるいは協約体系を基礎にした上で、東アジアの安全保障なり経済的な協力というものを考えざるを得なくなっているのではないですか。

— そういう意味では、ある人が言いましたけれども、パチッと論理的に一貫したものでない、創造的あいまいさというものを活用して

いくしか、具体的な方法はないんじゃないか。韓国との関係、台湾との関係、さらには東南アジアとの関係ですね。

それからもう一つ、話が若干変わりますが、仮に東アジアが将来の歴史の波だとしまして、これに対する脅威がどこにあるかという問題だろうと思うんです。非常に大ざっぱに言えば、外部的脅威と内部的脅威という二つに分けることができて、外部的脅威の認識の仕方は、東南アジアなんかは随分違っている、中国が怖いという国とソ連が怖いという国とがあつて、なかなか統一的なものが出てこない。あるいは台湾を見ても、台湾の視界はほとんど中国大陸にフォーカスが合つてしまつていて、ソ連の脅威ということを書かないわけではありませんが、弱くなっている。また、朝鮮半島を見ると、ここにはいかにして八八年オリンピックを成功させるかという当面の問題がありますから、余り刺激しないようにという意識がどこかに働いていて、共通の脅威という問題がなかなか絞られてこないところに、外部脅威に対する対応策として非常に難しい問題が一つあると思います。

それから内部脅威の問題、これは社会・経済の諸問題がありますけれども、一番身近な問題として言えば、フィリピンのNPAみたいな、いわば国内のゲリラ対策といいますが、反乱分子といいますが、そういうものにどう対応していくかということだろうと思えます。

中国のしたたかな対米、ソ、日動向

加瀬 これからのアジア太平洋地域を、紀元二〇〇〇年まで考え



てみると、これから中国がどのようにならなければならないかが大きな鍵になっていく。最近、中ソ接近が進んでいるということが盛んに言われるようになってい

ま。確かに昨年は中ソ間で貿易協定が結ばれる。五カ年の協定ですが、大した金額ではありません。また、フルシチョフ時代に中ソ対立が悪化して、中国が二千人といわれたソ連人顧問を追放して以来、初めてソ連の専門家が中国に戻るようになった。あるいは、中国にソ連がつくった、これまたいたした数ではありませんが、十七の工場について近代化を行なう。新しく七つの工場をつくることを約束した。ことしは中・ソ外相の相互訪問が行なわれる。最近では、首相レベルにおける中ソのサミットが行なわれるのではないとも言われていますが、私は鄧小平体制が続く限りは、米中、それから日中のパイプの方が中ソのパイプよりはるかに太いものであり続けるであろうと思います。

米中の接近が行なわれてから一時は、中国は、アメリカ、日本と結んでソ連に対抗するというはつきりした路線を打ち出していましたから、先ほどご指摘があったように、最近では自主独立外交ということを一層前面に出すようになりました。その中で米中、日中のきずなが弱まったような感じもしますが、それは表面的なことではないかと思うんです。昨年は、アメリカが中国に対して、砲弾を中心として、軍事的な協力を行なう。最近では中国国産の戦闘機五十機について、一機当たり大変な金額ですが、アメリカがアビオニクスと

リーダー・システムを売ることに合意するといったように、米中はもう一歩踏み込んだ関係を進めている。米中、それから日中と結んでソ連に対抗するという基本は変わっていないと思います。

中嶋 そうですね、これはいろいろ議論がある。私としては、自説を展開する以外ないんですが。(笑)

漆山先生と加瀬先生の見解について申し上げますと、中国をソ連に対抗するカウンターウエイトとして利用したいという、これはアメリカの伝統的な政策、あるいはかつての中ソ離間策だったと思いますけれども、これが、幻想に終わるのではないかということアメリカがわかってきたというのはちょっと言い過ぎ——つまり、そうあってほしいんですけど、アメリカないしは日本政府には、その幻想は依然としてあるのじゃないか。特にアメリカは、中国との間はまだフレッシュな関係ですから、余り手痛いことを受けてないんですよ。教科書問題もないし、靖国問題もない、それから日中間のような潜在的な異母兄弟としての歴史的摩擦がないですからね。アメリカの学者や国務省の連中と中国問題を話すと、物すごく甘いんです。中国はこのまま西側諸国にずれ込んできて、社会主義体制をやめてしまいがごとく、そして中国はすっかり安心で、ソ連に対するカードとして使えるというような意識がまだまだある、だから私はそのたびに「甘い」ということを言うんです。日本政府もそうだと思います。

ところが、中国は、確かに自主独立——きれいなこととしてはそうなんです。ところが、中国の外交というのは、自主独立とか、等距離外交とか、そんなものじゃなくて、マヌーバビリティというか、自分の利益になることなら何でもやるし、それから同時に、常に中

国の対外政策をめぐって国内のいろいろなリアクションがありま
す。特に中ソ関係、米中関係。米中が接近するんだって、林彪事件
という代償が必要であったわけです。いってみれば中国というのは
すごく袖の深い世界で、非常にしたたかで、物すごくいろいろな可
能性を持ちながら、それを同時に相手に見せないという、つまり戦
略においてこんなにしたたかな国はないのじゃないか。それを、き
れいに自主外交でございませうとか、一時は反覇権主義でございま
す——七〇年代はあれほどソ連と全面的に対決するのが永遠に変わ
らないようなことを言って、日本と平和友好条約を結んだ、反覇権
条約なんて言ったんですけども、今はそんなことを全く言わなくな
っちゃったわけです。ですから、その辺を余りきれいに見ると
間違えるという気がするんです。

そうしますと、今の中国は、ソ連との関係がかつての五〇年代に
戻るということはない、時代が違いますね。それから、五〇年代だ
って中ソは一枚岩ではなかった。中身はすごく対立していたにもか
かわらず、建前として一枚岩を掲げることによって、西側はだまさ
れたわけですね。スターリンと毛沢東は決して仲よくなかったにも
かわらず、一つの政策とか戦略の次元で見ると、東西冷戦の一翼
を担ったことは事実です。それからアジアでは、朝鮮半島からベト
ナム戦争に至るまで、明らかに中国は社会主義の一環として行動し
てきた。

こういうところは、中国が毛沢東を否定し、その戦略から離脱す
る、つまり毛沢東の戦略というのはソ連と絶対対決するという反ソ
戦略ですね。その反ソ戦略をとらなくなったということは非常に大
きいんですね。

例えば、S D Iなんていう問題を見てみると、この間、しょっち
ゅうアメリカからも、何とかS D Iを理解してほしいというふう
にペンタゴンも、ホワイトハウスも、いろいろな人が言っているん
ですね。にもかかわらず、鄧小平は「ノー」でしょう。それから、S
S 20の展開にしても、あれほどいろいろ言うはずの中国が黙って
いるでしょう。だから、そういうふうに分変わってきていると思
います。

もちろん、加瀬先生のおっしゃったように、中国はしたたかです
から、しかも西側がみんな見ている前で中ソ和解の党会談なんかを
やるんですよ。そんなにばかじゃないしね。そもそも中ソ和解を妨
げる三条件だって、あれがある限り中ソは絶対和解しませんと言っ
ていながら、だんだんよがり戻っていつているのは、そもそもあれ
は西側に対するプレゼントなんです。西側の首脳者が北京に行っ
て、日本の政府首脳もそうですけども、「中ソ和解、あります
か」とみんな聞く。そうしたときに、「いや、この三条件があります
すから和解しません」というのが中国のやり方で、これは、あの三
条件が出たこと自体が、中ソ和解に行こうという意思決定の現われ
です。それで西側や日本が心配しても今、非常にうまくやっている。
それを見越して三条件を出すという具体的な戦略、戦術が決まった
んだらうと見ています。

したがって、政策的なレベルでは、例えばS S 20とか21に対する
対応、それからS D Iの問題も今後かなり出てくる。あるいは、ひ
よっとすると、今のリビアの問題でアメリカがどうなるか、これか
ら大きく問題になったときに、じゃあ中国はレーガンを支持するか
という、そうじゃないと思います。アメリカのハイテクノロジ

や武器はいただきたいけれども、アメリカの戦略はいただきませんというのが中国の立場であって、最近のそれだけの変化——これから先どこに行くかはいろいろ議論が分かれても、それだけの変化でもソ連はすこく喜んでゐるんです。

モスクワから見ると、今の中国は非常によくやってくれる、とにかく、あんな嫌いな毛沢東を否定してくれたし、また、S D Iの問題でアメリカに組みしたら困ると思つていたところ、鄧小平がはつきり「ノー」と言つてくれる。それから、最近の日本の軍国主義復活、靖国の問題、そういうのでも、ソ連と同じようなことを言つてゐるわけですね。だから、その点で、中国というものをもうちょっと我々、意地悪く見ていかないといけない、中国は一枚上ですよ。

日本にいろいろ人員を送るときも、酒量は三分の一とか、絶対飲んじやいけないとか、いろいろの規則があるわけです。日本の外交官と接するときにはどういふことを言つていいとかね。そういう内示をこらんにするとわかりますけれども、いろいろきめ細かい配慮をしているんです。日本の財界人と会うときはこのことは絶対言つちやいけない、こういうことを言いなさい、とね。そういうことを考えますと、あれだけの大きな転換をやつてくるわけですから、それは大変なもので、その辺は注意しなまやいけない。

もう一つ意見を申し上げると、なぜ中ソがよりを戻さざるを得ないのか。これは、五〇年代、六〇年代は、お互いに、例えば毛沢東思想を掲げて世界を変えるんだとか、フルシチョフは平和共存でいくとつていた。ところが、今のソ連や中国を見てみると、国内がガタガタでしょう。現に石油の問題一つとっても、こういう状況の中で一体どうなるのか、大変な問題だと思ひますよ。ソ連は石油を

武器としても東欧諸国を押しえ切れなくなつてゐる。中国だって、石油は枯渇し始めてきてゐるし、国内はかなり不安定で、このまま中国がすんなりいくというわけにもいきませんね。そして、仮に鄧小平以後、うまくいったにしても、一人当たりのGNPは今世紀末によりはうまくいふというようなことから、確かに毛沢東時代までよりはうまくいき始めたけど、今、国際社会のひのき舞台に出来るだけの経済の状況なんてとんでもないわけです。一方、世界戦略の次元では大変なことをやつていくわけです。このギャップの中で中国は悩んでいますね。だけど、基本的に考えると、それは社会主義が二十一世紀にかけてだめになっていくプロセスで、けんかなんかしてられないという弱さのあらわれです。その面も見えていかなしいけないんじゃないかという気がしますね。

共産・中国との交際の仕方

漆山 今、加瀬先生、中嶋先生がおっしゃつたように、鄧小平時代は大丈夫だろうというご指摘、私も常識的にいつてそうだろうと思ひます。ただ、鄧小平以降が全く不鮮明であるということだと思ひます。

これは一般的な図式になるかもしれないけれども、今の中国を含めた共産圏の経済的な諸問題の立て直しの一つの考え方はNEPの考え方ですね。これは中国ばかりじゃなくて、北朝鮮だって合弁法でやつてゐるし、ベトナムだってある程度自由化をやらざるを得ないという問題もあるし、それから一時、これは政変によつてどうなつたかその後わかりませんが、南イエメンだって、ヨーロッパか

らの観光客を入れることによって外貨獲得を図ろうとした時期もあります。それからアンゴラだって、ガルフオイルからの資金投入をせよというようなことをソ連のアドバイザーが盛んにアドバイスした時期もありますしね。だから、いかにして西側資本主義を利用しながら共産主義を生き延びさせるか、あるいは再活性化させるかというものが、今の共産圏の最大の問題だと思わすね。ソ連だって恐らくその問題から逃げられないと思わすよ。

ただ、問題は、それを仮にネップだとしておきまして、ネップがある程度成功したときに、もとの命令経済へともう一度復帰するか、ネップからスターリン時代へ復帰するようになるのか、それとも一たんネップに入ったとしますと過去への復帰はきかなくなつて、行くところまで行かざるを得ない、簡単に言えば共産主義の崩壊というところまで行ってしまふだけのものを持っているのか。中国の場合、殊にこの問題はシリアスな問題として出てくるだろうと思わすですね。

残念ながら、私にはそれをどちらとも、今、読む力がありませんけれども、ただ、我々は、共産圏の不鮮明さという状況に直面しているということだけははっきりと言つていいのではないですか。だから、これは西欧化し、自由主義化してしまうというふうな断定で中国につき合うわけにはいかない。ひょっとしたらまた変わるかもしれないということが一つですね。

それからもう一つ、仮に中国が強大化した場合——現に核兵器の開発もほとんどんやっているわけですし、どういう勢力になるのかということだと思わすね。これは、東南アジアを含めて近隣諸国に対する脅威とならないかといえ、私は、そう安直に見るわけに

もいかんだろうと思いません。だから、その問題を考えながら、我々は中国と接近するという非常に複雑な接近の仕方しなければいけない。

それはどういふことかといえ、結局、中国に何十億ドルのお金を出す、技術を提供する、それはそれでしておいて、それにまさる力を周辺諸国につけるための努力、それは韓国であり、台湾であり、東南アジアでありましようけれども、それにまさる力をつける努力というものを、日本はやつておかなければいかんのではないかという気がするんですね。

後戻り出来ない中国の現代化とソ連の悩み

中嶋 今の漆山先生のご意見に同感ですが、さきほどの発言をもうちょっと言わせていただくと、鄧小平時代は大丈夫で、それ以後は危ないという観測が昔からあるんですね、必ずしもそういうふうに見えないんですね。つまり、鄧小平時代であっても、中国は、今おっしゃつたように西側をうまく利用しながら生き延びなきゃいけないでしょう。しかし、鄧小平時代は西側とのパイプでソ連……というのじゃなくて、鄧小平時代においても今いろいろソ連とやっているんです。例えば（大西北）計画なんていつて、第二次大戦中に日本軍が悩んだ新京ルートに鉄道を通してモスクワと北京の最短距離をやろうと、もう着工し始めた。これは、おとしの暮れに来たアルヒーポフの経済技術協力協定や、それから中ソ経済貿易合同委員会の発足、みんな十年期限で締結して、これがもう生きていますね。これは、こんなに西側や日本にいろいろ世話になつてい

るにもかかわらず、一切、日本には打ち明けてないんですよ。それから、陳雲さんなんていう人、ご承知のように今、鄧小平に衝突しているの見ていい人ですが、しかしながら彼は、日本の政界人や財界人が幾ら会おうとしても会ってくれないでしょう。そういう袖の深さを持っている、日本人は単純だから、中国が東京に向ける顔だけ見てつき合うけれども、向こうはもう一つソ連に向ける顔もあるし、いろいろの組み合わせがあるんですね。

ですから、鄧小平以後も、仮に中ソがかなり接近しても、西側とのパイプをパタッと切るのはほしくないと思うんですね。ただ、そういうことを非常にうまくやる能力は、少なくとも外交の上で持っているから、我々はそういうしたたかさに対して、それを上回る戦略なりシナリオなりをきちんと考えなくちゃいけない。日本人の対中国外交というのはまさにムードだけでやっているものですから、時々、急にしつぱ返しを受けたりするんじゃないかという気がするんですね。

私が言いたいのはそういうことだったんです、今の漆山先生の問題提起、非常に重要だと思ふんですが、中国はネップに成功するかどうかという問題、私はこんなふうに考えるんですね。確かにポイント・オブ・ノーリターンですから、もう一遍、毛沢東時代には戻らないと思ふですね。そうかといって、計画経済とか社会主義といっても、社会主義そのものがうまくいってないことは、中国も実は知っているわけですね。ですから、徐々にある種の混合経済みたいな形にはなっていくだろうと思ふます。だけど、中国で現にいろいろなことやって、鄧小平の政策が成功しているかというところ、私はそうは見えない。つまり、今、あちこちに物すごいガタがきています

からね。例えばインフレだつてすごくなっちゃって、毛沢東のモデルを壊すということはよかつたんですけども、今、どうしようもなくなつて、党内からも批判がある。不正も起る。それからワーツとやつたために日本からいろいろ買ったはいけれども、たちどころに外貨がなくなつちやつた。そしてまた日本は輸出をストップする、輸入をストップするというような状況が出てきていますからね。そういう状況の中で、今まではリベレーションでワーツとやっていたけれども、今後はレストリクションで少し引き締めていかざるを得ないと思うんですよ。そういう循環を繰り返していかざるを得ない。つまり逆流はしないけれども、蛇行はいろいろ繰り返していくだろう。

それで、これが一体どの辺まで行つたら、今の政策、つまり毛沢東時代と違つた政策が成功かというところ、これにはいろいろの見方があると思ふすけれども、一人当たりGNPが二千ドルぐらいになつて初めて成功だと言えんじゃないかと思うんですよ。それを考えますと、ほんとに中国はまだまだ遠い先のことなんです。一世紀単位で考えないと。中国の馬洪社会学委員長なんか言わせても、二十一世紀の中ごろではないか、と。だけど、これもすべてが順調に行つてです。経済成長も七割ぐらい続け、鄧小平以降も政治的不安定がない、そして人口もこれ以上ふえないという条件付きです。ところが、人口抑制政策一つとっても、最近、もう限界にきてまして、また少しふえ始めている。というところを見ると、すべてにおいて毛沢東思想のツケというところ、あるいは中国がヨーロッパに接して以来の近代化を本格的にやらなくて中華思想の中に閉じこもつて、汽車、汽船は孔子様の乗りたまわざるものなりきと言つた、そ

してつい最近、毛沢東思想は世界を照らすで、物すごい自己顯示をしていて、そのツケを一世紀単位で払わざるを得ないと思うんですよ。そうすると、ネップに成功したということが言えるのはかなり先のことじゃないかという気がしますね。

ですから、それまでは中国は必死になって、政治的、社会的には一党独裁の共産党権力を固めていかざるを得ないが、内部的には、だんだん開かれてきますから、共産党なんか嫌だという圧力が日に日に加わってくると思うんですよ。日本にきている留学生を見て、「中国の春」というような反体制グループにほとんどみんなアイデンティティを託しているわけです。にもかかわらず、一たび権力を握った共産主義者の政治システムはそう簡単に権力を改変しませんが、そういう中で今の中国というものはかなり存在していくのじゃないか。

その先には、今、漆山先生がおっしゃったように、根本的に共産主義から離脱していくという時代が、必ず来ると思っているんです。だけど、今の中国に、それを期待するとしたら、ちょっと間違いだ。私は、それをもっと先のことになるんじゃないかと思っているんですね。

中国とソ連の改革条件の相違

漆山 例のミシェル・タチュエが、もう二、三年前でしたかね、論文を書いている。これは、ソ連はどこへ行くかというような趣旨の問題だったんですが、そのとき彼は、一種のポナパルティズムみたいなものが出てきて、要するにイデオロギー不信というものがだ

んだん広がってくる。しかし、独裁体制は維持しなければいけないとなると、軍を中心とした独裁体制になっていくだろうと。しかし、彼は、イデオロギーよりも軍の独裁体制の方がまだましだという前提で言っているんですね。恐らく彼の脳裏にあった問題は、ポーンダのヤルゼルスキーだったんだろうと思うんです。

それからの類推というのはちょっと危ないかもしれませんが、中国の場合も、三不信とかいろんな形でイデオロギーに対する不満が出てきている。しかし、共産党の独裁体制というものはある程度維持していかなければいけない。となると、一種のポナパルティズムみたいなものが出てきて、何とか政権の安定を図ろうとするんじゃないか。そういう段階を経て、もし起こるとすれば、次の段階で共産主義の崩壊という過程へ入るかもしれないけれども、その一つ手前の段階も考えておかなきゃいけない、という感じがしますね。

加瀬 指令経済と市場経済が両立するわけではないですね。権力を集中するのが社会主義の大原則であって、限定的にも自由化しようとなれば、権力を分散しなければならぬ。経済権力を分散すれば、政治権力の集中といった鉄則も危くならない。最近、一部で社会市場経済なんていう不思議な言葉が使われていますが、昔、ヨーロッパの学者が、共産主義国というのはアコーディオンみたいな。一回自由化すると、またある時期になると戻って、締めつける。また自由化する。アコーディオンみたいたと言ったことがありますけれど、私は、中国の四つの現代化というのはそうはうまくいかないだろうと思うんです。ソ連も同じような悩みを抱えているわけですが、ソ連の方はもっと変わらないんじゃないですか。

中嶋 最近、徐々にソ連も、中国の農村改革なんか見習っているんですね。コルホーズの中に家庭中心の一種の生産体系をやるうとかね。だから、その点でも中ソは食い違いがなくなつてくると思いますが。問題はソ連も中国も、社会主義のシステムをとる限りという点にありますね。今の中国だって、福建省や広東省を思い切つて完全に自由化する、資本主義の論理でやってみるといえば、うまくいくと思えますよ、中国人の能力なら。だけど、それができないんですね。ちよつとやろうとすると、今までに基盤がないからいろいろひずみが出てくる。ひずみが出てくると、陳雲さんみたいに錦の御旗、「これが社会主義か」という人が出てくるわけです。ですから、そういう意味でいうと、ソ連も中国も、内政上いろいろな問題がある。

だから、太平洋時代ということが言われたころ、ちょうど中国は非毛沢東化をようやく始めた——華国鋒政権の時代だった。大平政権のときですけれども、そのときに一部の人たちは、これですつかり中国は太平洋経済圏の中へどんどん入ってくるという期待があつたんですけど、私はそれは無理だと思ひました。現に無理だと思ひますね。そう簡単にはいかない。

ですから、アジアの中でどうして中国だけが落つちたかということ、我々はもうちよつと冷静に見てみる必要があると思ひます。それは結局、社会主義のシステムという点に問題があると思うんですよ。

その点で、さつきも加瀬先生がおっしゃったように、確かにソ連はヨーロッパに変わって今、アジアにすこく関心を持っていますね。私も、ナホトカで開かれた、太平洋という名前のつく会議に出たこ

とがありますけれども、そこでソ連自身が太平洋国家だと盛んに言い、すこく関心を持っていたんですが、そこはどうなんでしょうか。ソ連はいろいろ出てこようと思うけれども、一方、さつき言つたように、物すこく国内問題に悩んでいますし、軍事力のコストに悩み始めているんで、ゴルバチョフ政権というのは、それができないほど、今、国内が大変じゃないかなという感じを受けるんですね。

石原さんとソ連に行ったおとしの日ソ円卓会議のときにも、バスの中で聞いてみたら、ガソリンの値段が一リットル四十五カペイカ。リッター四十五カペイカというところ、産油国でいながら日本と同じぐらいなんです。今はもつと値上がりしていると思ひます。国内でさえもガソリンが供給できない、あるいはすこく高くなつてきている、これで果たしてあれだけの軍事力を維持して、東欧諸国やアジアに出ているか。だから、ソ連は、その点で私は、軍事力だけじゃなくて、微笑外交というか、いろいろなことをやってくるんじゃないか。まさにシェワルナゼ、ゴルバチョフというのはそういう線で動くという気がするんですね。

加瀬 昨年三月にゴルバチョフ書記長が誕生してから、一部ではゴルバチョフが鄧小平になるのではないかといったような期待がありました。私は、それは間違っていると思うんです。ということ、やはり文化大革命のもとであれだけ大胆な改革を中国で行なえたのは、件を経験しているから、これだけ大胆な改革を試みることでできたのであって、ソ連の場合には、根本的に事情がちがつている。ソ連が成立してからもつとも大きな事件は独ソ戦争でしょうが、中国の文化大革命のように、ソ連の共産党による支配が根底から大きく揺

れたことはないと思うんです。ですから、改革をやるうとしても、中国のように全面的なオーバホールを試みることはできません。ソ連では強い情性が働いている。ゴルバチョフ政権のもとでソ連が大きく変わるといふことは、まず期待できないだろうと思います。

ゴルバチョフ政権になってから、ソ連は太平洋地域に積極的に出るようになりました。例えば昨年をとると、ヤヒポフ副首相がインドネシアに行っていますが、これは二十二年ぶりですね。その前にインドネシアに行ったソ連の高官といえばミコヤン副首相で二十二年前です。その後でスカルノ体制が崩壊して、スハルト体制のもとでインドネシア共産党の大虐殺が行なわれるということで、インドネシアとソ連の関係が冷え切っていた。その後、ヤヒポフ副首相はマレーシアへ行って、ことしはマハティール首相がソ連を訪問する。あるいはソ連のタイに対する接近についても積極的なものがあります。

ソ連はフィリピンでは大失敗をした、二月七日に行なわれた大統領選挙の後には、マルコス大統領に祝意を伝達に行ったのはソ連大使だけなんです。ですから笑話があつて、あれはゴルバチョフもシェワルナゼも外交経験が全くないから、マルコスをマルクスと間違えたんじゃないかということも言われていました。

それから、南太平洋の小さな、島嶼国に対しても漁業協定を使って積極的に接近しています。今年一月にシェワルナゼ外相がソ連外相として十年ぶりに日本にやってきたというのも、日本を一層重視するようになったことも当然の動機ですが、それよりもソ連がアジア・太平洋戦略を持つようになったのではないか。その一環としてシェワルナゼがやってきたのではないかと考えるべきだと思います。

ソ連は膨張主義と退却主義の国

漆山 私が申し上げたかったのは、ソ連外交のパターンは何かということですね。これは非常に簡単な話なんですけれども、ソ連は膨張主義者だということをよく言うけれども、私は必ずしもそう思っていないで、膨張主義者であり、退却主義者であるという両面性を持っているんだというのが私の考えなんです。

若干歴史的な事柄になってしまいますけれども、一九二〇年にポーランドに赤軍が入っていくが、ポーランドにやつつけられて逃げてくる。それ以来、一九三九年の第二次大戦が始まる直前のバルト三国の合併とかフィンランドとの戦争というところまでの十八、九年というものは、ソ連は対外的軍事力を行使してないんですね。ということ、弱いところには出るけれど、強い反撃を受けると縮むというソ連外交のパターンというものは当時から形成されていた。

例えば、NATOができた後だって、オーストリアからの国際条約で兵を引く。そのかわりオーストリアを中立化させるというようなことをやる。

あるいは、一九七二年、サゲトがエジプトにいるソ連軍を追い出したとき、ソ連は一万数千名の要員を持っていたので、層直ろうと思えば居直れたわけけれども、喜々としてという言葉はちょっとおかしいかもしれないが、案外柔直にサーッと出ていく。力関係の計算というものに非常に強い証拠だと思ふんです。

七〇年代を見ても、この時期は確かにアメリカの挫折期ですね。デタント、デタントと言うけれども、実際はウォーターゲートであ

り、ベトナムの敗戦であり、アンゴラの敗戦であり、イランの敗戦であり、アフガニスタンの失敗——私はあえて失敗と言いますけれどもね。そういうときにソ連はガッツと出てきた。それで、レーガンの強いアメリカ政策というもので、SDIを初め、今度のリビア爆撃とか、軍事費の物すごい増強とか、ヨーロッパにおける核ミサイルの配置とか、そういうことをずうっとやってきたところ、ソ連は一步立ちどまった。

ソ連の判断は、今ストレートにアメリカと対決すれば非常に危険である。一步後退して、いかに西側を利用するか。それは経済協力とか技術援助という線だと私は思っているんです。

ただ、アジアの戦略としてソ連が何を考えているかというのは、東南アジアのカムラン湾に基地をついたり、兵力を北方領土にふやしてみたり、あるいは北朝鮮に非常に接近して、SS20を配置してみたりするのは、力は政治的なメリットにかえ得るんだという信仰心みたいなものがあって、軍事力は政治条件を転嫁し得るということだろうと思うんですね。

では一体どういう政治を考えているのかといえば、ちょっと矛盾するかもしれないけれども、中国に対する南北からのさきみ撃ちとか、あるいは日本の中立化というような問題があるんだろうと思うんですね。アジア集団安保の提唱にしても、核兵器不行使の提唱にしても、何とか日本をアメリカとの連帯から離してしまおうという意思があるんじゃないかと思うんですね。

加瀬 ソ連が太平洋地域でキープレイヤーとなったのはかなり新しいことです。一九七〇年代の初めをとると、ソ連はアフリカから東南アジアまでの間に一つも軍事基地を持ってないわけですね。し

かし、七〇年代末になると、サウジアラビアと紅海を隔てて向かい合っているエチオピアに海軍基地を持つようになる。南イエメンに持つようになる。アフガニスタン、カンボジア、ベトナムというようにソ連の軍事基地のベルトがでか上がる。ソ連が何をねらっているかというのはもちろんよくわかりませんが、太平洋地域におけるソ連の軍事力の異常な増強というものはこれからも進んでいくと考えなければいけないと思うんですね。

漆山 力関係というものを、彼らは軍事力を中心に図るわけだけれども、それは必ずや政治的なメリットに変化し得るという信念じゃないでしょうかね。何であんな膨大な核兵力をつくるかということとは、彼らが実際に使うからというよりも、あれによってヨーロッパにおける反核運動を助長したり、日本を非核地帯にしてみたり、そういう政治的なメリットへ変えていこうということじゃないかと私は思っておりますがね。

加瀬 インド洋も含めてこの地域で、イランが崩壊するか、あるいはアラビア半島がおかしくなるとか、フィリピンが共産化するというようなことがあった場合には軍事力は有効でしょうが、ソ連は大変な投資を行なっているわけですね。

中嶋 ソ連が非常に活発に太平洋地域に出てきた、それは中ソ和解という問題が大きいと思うんですね。中ソが物すごく対立していれば、ソ連だって行動余力がないけれども、とにかくかなりよくなってきたわけですね。現に、中国だって兵力を百万人削減するなんて言っており、ソ連にとっては余り心配なくなってきた。これは、ソ連のほかの地域に対するマヌーバビリティを増大させていると思うんですね。ソ連にとって一番の懸念は、中国との対立という問題

です。その点で、七〇年代の東アジアというか、ユーラシア大陸東部というか、そこにおける国際政治の構図と、中ソ和解はいろいろ議論がありました。とにかく、國境で貿易も行なわれて、共同プロシエクト、鉄道を建設しようということとは非常に大きいし、それから中國自身が、あすソ連が攻めてくるというようなことを言わなくなった、防空壕を掘って、ここに自分たちは閉じこもるなんて、そんなことを言わなくなった。それは非常に大きいと思います。

ただ、ソ連は七〇年代から八〇年代前半にかけて、いろいろの教訓を学んでいると思うんです。つまりアフガニスタンというのは、アメリカのかつてのベトナムと同じように、ソ連の人たちの本音は、これは困ったことをしてしまつたという感じはあると思いますよ。この泥沼から何とか足を抜きたい。しかしながら、何か口実がないとメンツを失うという問題がありますね。

それから、あちこちで軍事力を行使したけれど、その効果は必ずしもよくない、世界でソ連は憎まれてますしね。しかも、ワルシャワ条約機構に駐留したりすること以外に、ソ連のアドバイザー——アフガニスタンに出している兵員なんかそうだと思えますけれども、そういうものを維持するだけで、年間百億米ドル以上のお金が要ると言われています。つまり、ソ連の世界戦略を維持するのは非常にコストがかかる。

私がさっき言ったように、ソ連は国内的に、経済その他で非常に悩んでいる。だから、そうなつてくると、ストレートに軍事力をひけらかして出ていくというような、かつてのソ連があちこちで見せたようなやばつたいやり方はできなくなつてきた。それだけに、ゴルバチョフ、シェワルナゼ体制になつてかなりスマートに出てくる

んじゃないかという気がするんですよ。

この点、我々としても非常に注意して見ていかなきゃいけないんじゃないかと思うんですね。

そういうことからすると、今後、ソ連は、従来以上に、あちこちに平和外交を繰り広げていくんじゃないでしょうかね。そこで、それは一体なぜなのかというさっきの重要な問題に入りますが、一つには、ソ連というのは、今のゴルバチョフの改革を見ていてもそうですけれども、一つのができちゃうとなかなか変えられない国です。

それから、科学技術が物すごく立ちおけていることは、彼ら自身わかつていられるにもかかわらず、なかなかモデルチェンジができないんです。ひとたびつくつたコピーの機械、ソ連のコピーなんかどうしようもないんですが、それをパツパツと技術導入してやればできないはずないけど、ゼロックスの機械そのものもどうしようもないものを使って、それでまた生産している。

軍事専門家に言わせるとそうらしいんですけども、SS20なんていうのも果たしてこれからの時代を担うような兵器かというところ、どうもそうじゃないだろう。一回つくつちやつたから、それを配備しなきゃいけないという、どうしようもないソ連の非効率というか、保守主義というか、そういうものが一方にあるような気がしません。

だから、そういう点が一方でチラチラと出ながら、他方ではそれを乗り越えて、新しいスタイルをつくつていかなきゃいけないというような画面が、これからは出てくるんじゃないかという気がするんですよ。

北朝鮮をめぐる中ソの動向

加瀬 ソ連がほんとの意味で世界的な勢力になったという七〇年代の後半に入ってからだと思ふんです。七〇年代の初めをとりますと、ソ連の衛星国はキューバとモンゴルを除けば全て東ヨーロッパのなかに閉じ込められていたのが、七〇年代末になると、今、問題になっている中米のニカラグア、あるいはアフリカではアンゴラとかモザンビークですか、先ほど申し上げたエチオピアからベトナムまで、ソ連の勢力圏に入る国が生れるわけですね。

それから、ソ連は、新造艦艇の数、総トン数だけから言えば世界一の海軍を持つようになる。しかし、いろいろな障害に行き当たって、最近ではソ連の膨張する勢いを大きくそがれてしまった。他方、アメリカは、今度のリビアに対する攻撃がそうですが、ニカラグアと反共ゲリラに対して軍事援助を行なう。それからアンゴラ、アフガニスタンの反共ゲリラに対しても積極的に支援する。こういったアメリカの行動は、アメリカがベトナム戦争で失敗して以来、ニクソン政権、フォード政権、カーター政権——ソ連がアフガニスタンを侵略するまで——のもとでは、全く想像もできないようなことですね。

最近、アメリカでは、ニュー・インクペンションリズムとか新干渉主義とかレーガン・ドクトリンと言われていますが、強いアメリカが復活した。七〇年代と八〇年代とでは、アメリカのありかたが大きく変わった。米ソの力の相関関係が、またアメリカに有利になってしまったという状況が生まれたと思ふんです。

さらにこの地域で心配されるといえば、お隣の朝鮮半島ですが、

八八年の春には全大統領は、再選を禁じている韓国の現憲法の規定に従って、辞任しなければならぬ。八八年秋にはソウル・オリンピック大会が催されますが、北朝鮮はオリンピック大会を共催しようということを呼びかけ、今度、非同盟諸国会議がジンバブエのハラレで開かれますが、ここで、八八年のオリンピック大会共催に持ち込むことについての支持を取りつけようとしているわけで、うまくいかないようですね。

金日成主席は、韓国に対する態度を相当に硬化させているようにみえますね。ついこのあいだカストロ首相が北朝鮮を訪れて、北朝鮮とキューバの間に友好協力条約が結ばれた。このときに、金日成主席は、八八年、ソウル・オリンピック大会が開かれれば、世界平和を脅かすことになるから、北朝鮮として傍観しないと云っていますね。

漆山 傍観しないというのは……。

加瀬 何をやるかわかりませんが、最近、そういった鼻柱が強い言動が非常に目立つようになっていてます。ワインバーガー国防長官が今月の初めソウルへ行ったときも、また、そのしばらく前に韓国の国防相も記者会見していますが、朝鮮戦争が終わって以来、これほど北の脅威が切実なものになったことはないと言っていますね。

漆山 先程、アメリカと日本の中国に対する見方が甘いというお話もあつたけれども、私は、中国をアジアにおける安定勢力にしようという考え方は破産するだろうと思ふんですね。その中心的な命題は朝鮮半島だと思ふんです。

ご承知のように、現状維持という線、中国は、日本やアメリカに対してはそういう顔を向けてますね。それで韓国との間にある程度

の交流を認める。ところが、一方においては、唯一の同盟国は北朝鮮ですから、北朝鮮の今まで主張してきたこと例え ば高麗連邦とか、米軍の演習反対、そういうようなことは全部中国は支持しているわけですね。そうすると、中国の政策というのは内部的な矛盾に直面しているわけですね。これは、普通のときはいいけれども、何か危機が迫ったときに、この矛盾を彼らが解決できるかどうかという問題が一つあると思うんですね。

だから、私は、中国をアジアにおける安定勢力だというふうに期待しない方がいいんじゃないかと考えているんですね。どうもそこどころの読みが日本人は甘いんじゃないかと思う。殊に、今、ソ連は慎重だという話があって、微笑外交だという話もあるわけですが、何とかして朝鮮半島で深刻な事態が起って、そして中国がシレンマに落ち込んでしまうという状況をつくることは、ソ連にとつて大変プラスでもあるわけですからね。

それからもう一つ、北朝鮮に対して中国、ソ連がどの程度の影響力を行使し得るのかという問題ですね。少なくともよく言われるように、北朝鮮は自力で三カ月ですか、六カ月ですか、戦闘できるだけの能力を持っていることになれば、既成事実をつくって、それを中、ソが追認するということもあり得るし、我々は、そういう前例を、ベトナム戦争でさんざつばら見せつけられてきたわけですから、余り楽観しない方がいいんじゃないかという気がしているんですね。

中嶋 私は、その辺、ちょっと意見が違ふのかな。私は、中ソ和解というところを一つ軸に置きますから、今はソ連も、特に朝鮮半島が危機に陥って、中国がシレンマに陥るのを喜ぶというような構

図じゃなくなってきたところに、朝鮮半島情勢の新しい面がある。つまり、従来、金日成はモスクワに行くか北京に行くか、非常に気兼ねしてたと思うんですね。それが、最近は余りそういうことを気兼ねしなくなつたんじゃないかという気がするんですね。逆にいうと、金日成は兩者の間を渡り歩いたものだから、両方から、ほんとは信頼されてなかったんですね。モスクワの連中も、北朝鮮のことを言うと嫌な顔をする。金日成が中国へ行つたときも、これは四人組時代でしたけれども、せせら笑われたりして非常に不愉快な思いをしたというようなこともあった。こうした構図が基本的にあった。にもかかわらず、今や朝鮮半島というのが、ソ連、中国、ピョンヤンという緩やかな同盟関係の復活の中にあるんじゃないか。さらにそれにベトナムも加わりつつあるんじゃないか。将来、アフガニスタンも加わるんじゃないかというふうに思うものですから。そうすると、ソウル・オリンピックなんかはうまく彼らでやるんじゃないかという気がするんですね。中国が参加して、そしてモスクワも参加する。北朝鮮は中国以上に不安定勢力だと思えますけれども、にもかかわらず、今の国際環境の中で北朝鮮が南進して統一政策を実現するような状況にはなくて、意外にその辺、例えばソウル・オリンピックを北朝鮮もうまく利用して、金日成、金正日後継体制を世界にプレイアップするようなことをやるかもしれない。そつちの可能性もあるんじゃないかしら。

アジア諸国協力の原則

加瀬 最後に、平凡な質問になりますが、太平洋時代が明けつつ

ありますが、これから日本はどうするべきかということを両先生から一言ずついただいて、終わりにしましょう。

漆山 アジア諸国が協力し合うという点においては、幾つかの原則みたいなものがあると思うんです。私は冷戦主義者かもしれないけれども、太平洋の共同体を目指すとして、それには、差し当たり共産諸国は入れるべきではないという、極めて陳腐な原則もっています。将来、中国がほんとに自由化したときはいいですけども、現状ではまだアンサーテンな部分があるわけですから、入れるべきじゃない。

それから二番目は、仮にアジア共同体みたいなものがだんだんできてきたとして、それはオーブンなものであって、一種の第三勢力みたいなものになってはいけない。アジア主義とでもいいますかね。例えば、それはアメリカを入れるにしたって、カナダを入れるにしたって、第三勢力としては入れるわけにいかないわけですから、第三勢力みたいなものにしちゃいけないということ。

それから三番目は、私は余り好きじゃないんだけど、日本が太平洋共同体の安全保障にどういう寄与の仕方ができるかという問題だと思うんですね。結局、北東アジアと東南アジアをつなげる、俗にいうシーレーンというもの、これは日本、韓国、台湾にとって非常に重要な問題ですから、これの安全保障を考える必要があるということ。

それから、もう一つは、総合安全保障論というものもありますけれども、フィリピン自体を考えても、ああいうゲリラ戦争が起こった場合にどうしたらいいかという、三つぐらいのやり方があるだろうと思うんですね。一つは、外からの援助、補給を遮断するというこ

とですね。これはベトナム戦争で失敗したケースですけれども。二番目は、人民である水とゲリラである魚とをどういうふうに分離するか。マラヤの戦略村とかベトナム戦略村ですが、これがフィリピンは十分に分け切れてないですね。三番目には、民衆の生活水準をどうやって向上させるかということだと思います。

そのうちの、日本が今の状況でなし得ることは三だけですね。一と二は、やるとすればアメリカがやるということになるでしょう。それは総合安全保障といえませんが、そういうようなこともやらざるを得ない。

最後にNATO型の安全保障体制は無理だろう。どうしても各国の格差が大き過ぎますので、NATO型は無理ですから、アジア的あいまいさというものを多分に活用しながら、実質的な連携を進める方法はないかというふうに考えますね。

経済を中心とした活力の太平洋時代

中嶋 私も、アジア太平洋と一口に言っ、いろいろな可能性を語ったんですけども、冒頭に申し上げましたように、経済の実績から言くと、日韓台がずば抜けていくだろうが、ASEANにはいろいろの問題がある。

例えば、太平洋のもう一つの大きな自由の環であるオーストラリア、ニュージーランドを見ると、最近では労働党政権で、アメリカの艦隊さえも、安全保障条約があるにもかかわらず寄港できないような状況ですし、この地域は非常に多様性があり、それを一つの枠にはめることは無理だと思いますね。

したがって、アジア太平洋地域の可能性をそれぞれの次元で、外交上はいろいろクロスする形で、場合によれば二国間でもいいし、一種のリージョナリズムでもいい、そういうものがクロスする中で、全体がバイタライゼーションするような形に考えていくべきであって、今、漆山先生がおっしゃったように、これをハードのシステムとして考えると、途端にいろいろ出てきますね。中国が入るから入らないかという問題だつてあるでしょうし、中国が入ったために東南アジアの周辺諸国は物すごく脅威に感ずるということもありま。それから、今度はインドシナ半島、ベトナムが落ちついてきたらどうなるか、ソ連が出てきたらどうなるかという問題が出てきますから、とてもそういうものは無理だと思えます。

私は、アジア太平洋地域は経済を中心とした活力の時代なんであつて、これは国際政治の論理とちよつと切り放した方がいいんじゃないか。少なくとも、今の国際政治の縮図を反映するような機構をつくることは無理だと思えますね。

それは同時に、さっきちよつと台湾のことに触れたんですけれど、台湾問題というのは非常に重要だと思ふんですね。アジア太平洋地域の地勢学的に見ても、まさにかなめの位置にあります。シーレーンの問題をとつてもそうなんです。だけど、この台湾は国際社会からエクスクルズされていくわけです。にもかかわらず、一つの経済的な実態、アイデンティティとしては、非常にパフォーマンヌもいい。こういう台湾を、今の公的な国際関係を反映するシステムを考えていくとすると、みんなそこを除外することになつちゃうんですね。ですから、まさに民間の時代の国際版みたいなことで考えていくべきでしょうね。そうしないと、台湾というのはIMF

にもガットにも入っていない。国連からも追放された、今回のアジア会議でもああいふことになつたんですが、にもかかわらず、そこに存在しているということは、逆に今日の国際社会、アジア太平洋地域の到来というものは、国連とかそういうものを中心にした公的な国際システムが、いかに形骸化しているかということを示している証拠じゃないかと思えますね。

私は、別に台湾だけをひいきするつもりはありませんが、中国研究者としては、台湾問題は中国の内政問題だから、あなた方が解決してください、その限りにおいて我々は北京も台湾も両方等しく考えるべきだというふうに、自分で言行を一致させているつもりなんですけど、そう考えますと、余りにも台湾が不当に軽視されているわけですね。今、日本は、台湾がこんなにいるからこそ安心しているらるるんです。ここがガタガタしてきたなんていうことになつたら大変なことになる。そういうことを考えると、やっぱり台湾を除外するということもできません。そういう状況の中で、経済の実態を反映させるような一つのネットワークを考えていけばいいんであつて、それを何とかのメンバーシップみたいなことになると、途端に崩れていく。

つまり、ある意味では、二十一世紀にかけての一つの夢を語る場であつていいわけで、それが余り現実論になつてくると、途端にいろいろ問題が出てくるんじゃないかというふうに思つてますね。日本外交はそういう点を十分注意していかなくちゃいけない。それから、ソ連の出方に対してはいろいろなメジャーで慎重に、同時に警戒的に見ていかなくちゃいけない。

一方、アメリカが、最近、ちよつと不安なんです。カダフィの

リビアに対する対応を見ても、フィリピンに対する対応を見ても、ニカラグアに対する対応を見ても、何となくレーガン政権、このところ真昼の決闘をやり始めているような感じがして、果たしてこれといったかなというような気がします。特にフィリピンなんかについては、これは皆さんも恐らくそういう意見だと思います。余りにもおせっかいでありすぎて、逆に第二のベトナムになりやしないかという懸念があるわけです。果たしてアキノ政権がうまくいくかどうかという問題もありまして、やっぱり日米関係というのは太平洋時代の——これは、重要だから、むしろ話が出なかつたんであって、一番重要な関係ですから、ロン・ヤス関係みたいなパートナーシップがあるとするならば、この問題についても、やっぱり日本なりの見方をアメリカに提起していくことが必要じゃないかという気がするんですね。

日米基軸を忘れるな

加瀬 私、今度のアメリカのリビアに対する攻撃や、あるいはニカラグア、アンゴラ、アフガニスタンのゲリラに対して積極的な支援を行なうようになったというのは、アメリカが大国らしい、あるいはひさしぶりに強国らしく振る舞うようになったということから、日本の安全と繁栄がアメリカの軍事力と、それからその軍事力を必要ならば行使する意志に依存していることを考えると、日本国民として喜ばしいことだと思います。ただ、フィリピンに対するアメリカのこの間の干渉のようなことは、うまくいくのかなという不安の方が大きい。アメリカはカーター政権のときの人権外交のよ

うにしばしば感傷的なことをして失敗する。

何といっても、日本にとって日米関係が大切です。太平洋時代という、夢を語る、バラ色のイメージが強いものです。しかし、ソ連がアジア・太平洋地域に対して積極的に出ようとしている、あるいはこれから朝鮮半島、中国、インドネシアといった諸国がどうなるのかということを考えてみますと、バラ色というよりは、この地域がかなり揺れることになるのではないかと思います。

漆山 これは繰り返しますが、日米関係が大切だというのはまさにそれとおなじですが、さっき申し上げたように、万一、アメリカがアジア政策の中心を中国に置くようなことになったら——可能性は非常に小さいと思うけれども、非常に大きなダメージになってしまふんで、そういうあたりの取り決めを、貿易摩擦のクルミを何ぼ買うかというような程度の話じゃなくて、大枠を日米の政治家がきちんとしておかないかんのじゃないかという気が、私はしているんですね。

それからもう一つ、あくまでも一般論ですけども、権威主義国家と共産主義国家というものを分けておかなければいかんのじゃないか。それを分けないで、両方とも独裁だから両方とも倒せというの、わかりやすいけれども、うまくないのじゃないか。私は権威主義がいいとは思っておりませんけれども、しかし、それはある程度分けて考えていく必要がある。

加瀬 ホメイニさんよりはパーレビの方がはるかにいい。

漆山 その方がずうっといいということですよ。

編集部 長時間、どうもありがとうございました。